

歴史と伝統文化の
まち・成田。市内に
は、歴史ある文化財
が多数あります。



天真正伝香取神道流「目録・免許・極意之巻」(大竹利典氏所蔵)

天真正伝香取神道流(千葉県指定無形文化財)

日本最古の武道の源流を今に伝える



流祖 飯篠長威斎家直

天真正伝香取神道流は、香取郡飯笹村(現在の多古町)に生まれた武将、飯篠長威斎家直(1387~1488)が室町時代中期に興した武術です。その内容は多彩で、剣術、居合術、槍術、薙刀術、手裏剣術、棒術、築城術などいわゆる武芸十八般と呼ぶべき総合武術です。現在、第20代宗家は佐原市香取におり、唯一の極意皆伝者である大竹利典さんが下福田の道場で香取神道流の型を伝えています。

香取神道流の特徴は、常に戦国時代さながらの実戦を念頭に置き、相手の攻撃に対し一瞬早い攻撃により必ず倒すという、すべての技に一撃必殺の工夫がなされていることです。稽古では木刀を使い防具は着けません。常に死と隣り合わせている大変厳しいものです。しかしその一方で“兵法は平法なり”として、戦うことを厳しく戒めています。すなわち兵法は平和のための法であって、戦わずして勝利を得ることが最上であると教えているのです。“一撃必殺”の技術の習得と“平法”の順守。一見矛盾するようなこの問題を解く鍵となるエピソードを大竹さんが語ってくれました。

「実は、昭和35年、香取神道流が武道で初めて県の無形文化財に指定される時、県の担当者に試合を申し込まれたのです。とても困惑し指定を辞退することも考えましたが、歴史的価値が認められるよい機会でもあり、わたしが試合に臨むことになりま

した。禁じられている他流試合を行う以上、もし負けたら死ぬしかない。当時はそれぐらいの覚悟がありました。わたしが防具も着けずに、生死を賭けて試合に臨む覚悟であることを知った県は、結局、手合わせをすることなく無形文化財に指定しました。“まさに戦わずして勝つ”でしたね」

最近、古武道ブームもあり、数多くの欧米人が精神修養のために大竹道場を訪れています。外国人第1号はアメリカ人のドン・ドレイカーさん。東京オリンピックの柔道で金メダルを獲得したアントン・ヘーシングの武道の先生でした。大竹道場でその技と精神を17年間学び、海外に香取神道流を普及させた第一人者です。今や世界各国に広がる香取神道流は、600年にわたり連綿と受け継がれている日本武道の源流です。

伝統の重さと責任感、それを誇りと感じる大竹さん。10月18日、国際文化会館で行われる「第13回日米草の根交流サミット千葉大会成田地域分科会」では、日本の伝統文化の代表として香取神道流が披露されます。

寸分の隙もない構え



編集後記

日本は、世界一の長寿国といわれており、市内にも100歳以上のお年寄りが4人います。寿命が長くなると当然人生の持ち時間が長くなり、余暇の過ごし方も人さまざまです。本号では、特集の一つに公民館まつりを紹介しましたが、

市内の公民館には、545ものいろいろなサークルがあり、約8,000人の人たちが趣味に教養にと楽しみながら余暇を過ごしています。人生をより豊かにする一つのきっかけが、この公民館まつりで見つかるかも。